



つまらないものですが

贈り物をするときの表現

実際の役に立つ日本語を話し、文化的にも受け入れられる方法で日本人に接するためには、アメリカの生徒は日本語に特徴的な謙遜表現を理解しておく必要がある。謙遜の気持ちを表す例として、ものを贈るという行為を取り上げる。この授業で、生徒は謙遜するということを理解し、日本文化における謙遜の姿勢の重要性やそれを表す機会について学ぶ。生徒にとって、日本文化のなかで実際に使われている言葉づかいや態度で贈り物をし合うことは、単なる「ロールプレイ」とは違った経験となることだろう。



デブラ・グラシェーン
Debra Glasheen

アップルトン・ウエスト高校
(米國、ウィスコンシン州)

目的

言語面の目的

贈り物をするとき、謙遜の気持ちを表現できるようになる。

学習する機能	学習する表現	学習する語彙
❖ 謙遜を表現する	❖ つまらないものですが、おもしろくないものですが、ちいさいものですが	❖ 贈り物をするときの謙遜する言葉

文化面の目的

贈り物をするときに、適切な謙遜の気持ちを表すことを理解する。
謙遜の態度や身ぶりを表現する。

LESSON PLAN

用意するもの

生徒は、手頃な値段のプレゼントを風呂敷に包んで持ってくる
贈り物をする際に、
謙遜して話している場面がでてくるスライド

授業の進め方

1. 謙虚さを理解させる（10分）
 1. 教師は授業の冒頭で、いかに自分が美しく、素晴らしい教師であるか自慢する。
 2. 教師は、自分が自慢してみたことを生徒に告げ、「自慢ばかりする人と一緒にいるとどう感じるか」といった質問をする。
 3. 教師は、10代の若者がよくするような自慢話の例を読み上げる。生徒をグループに分けて、このような人物と一緒にいた場合、どのように感じるか、数分間話し合わせる。
 4. グループでの話し合いの結果を発表させる。
2. 生徒の文化から日本の文化へと話題を移す（3分）
 1. 教師は、謙虚さに対する生徒の理解と、日本文化における謙遜の態度に対する理解を関連づける。
 2. 日本では謙虚であることが重要であり、謙遜して振る舞うべき場合が多くあることを説明する。
3. 日本の贈答の習慣について紹介する（3分）
 1. 日本文化における謙遜の態度を端的に表している例として、贈答行為を紹介する。
 2. 日本で物を贈るときに、日本人がどんなことを言
- い、また、どのような態度やジェスチャーをとるかを、説明する。
3. 教師が日本文化における贈答を模倣する。
4. 物を贈るときの謙遜の表現を紹介する（5分）
 1. 教師は、「つまらないものですが」「おもしろくないものですが」などの表現をOHPで提示する。
 2. 言葉の意味について説明する。
 3. 生徒に、これらの表現の発音練習をさせる。
5. ロールプレイ（20分）

次のような手順でロールプレイさせる。

 1. 生徒の1人が、適切なことばやしぐさで他の生徒に贈り物を渡す。
 2. 贈られた生徒は、次の生徒に自分の贈り物を渡す。
 3. 次々に贈り物のやりとりをさせる。
 4. クラスの全員が贈り物を受け取ったら、全員で「いただきます」と言って、包みを開け、もらった相手に丁寧に礼を言う。
6. まとめ（5分）

次の点について、生徒に話し合わせる。

 1. アメリカと日本双方の文化における物を贈るときの違いと共通点は何か。
 2. 今回の授業の経験でどういうことを感じたか。
 3. アメリカと日本それぞれの文化において、物を贈り合うことの意義は何か。
7. 評価
 - ❖ ロールプレイ

文化理解と外国語学習について

人を通しての文化理解、ことばを通しての人間理解を広げたい

「異文化の人びとの間の橋渡しをしたい」。アメリカ人の私が、京都の寄宿先の畳の部屋に座って、この人生の信念となるような思いを決意したのは、16歳の時だった。

一体何が、16歳の私にこのような決心をさせたのか。その答えは、日本での体験にあることは明らかだが、直接のきっかけはもっと簡単なことだった。日本でテレビのゲーム番組を見ていたときのことだ。番組の出演者はすべてアメリカ出身者で、アメリカ的基準でいえば申し分のない人物として紹介されていたが、日本の文化を理解していた私の基準からすれば、まったくもってあきれられるような番組であった。いい慣習であっても、正しい教育を受けていない視聴者の目にはばかげた慣習にうつることで、人びとは他人のいい面を見ることができない。このことが私には悲劇に思えた。このゲーム番組自体は大して意味もない番組だったが、私にはそれが、国民や文化、国家間の相違を表す縮図と思えた。私は人びとを教育し、お互いに相手を尊敬するようにしたいと思った。

いまでも、その思いは変わらない。問題はもっと複雑だと理解するようにはなったが、ほぼ20年前に感じたその思いが今も自分の仕事や普段の生活を送るうえで大きな力になっている。

私は、外国語教師として、次に挙げるような理由で生徒たちに異文化圏の人びとについて知る機会を与えたいと願っている。その理由とは、何かをしようとするときに、第二の文化がもっといいやり方を教えてくれること。また、第二の文化を知ること、行動を律する「文化」が自分にもあるということを理解でき、さらに、他のどんな文化に対しても心を開いて接することができるようになる。そして、友情の輪が広がっていく。個人の友情と文化理解を通じてこそ、我々は世界の平和と正義を実現することができるのである。

日本人、日本語、そして日本文化というものは、私の心の中で特別の位置を占めており、それらは私の一部でさえある。人格形成期に日本人の家族と1年を過ごしたことによって、私はある意味で文化的に日本人としての性質を備えているのではないかと思っている。自分の行動を他人に説明するとき、「私がこのように行動したり感じたりするのは、日本に住んでいたからよ」と私は何度となく言ってきた。生徒と日本の文化を共有できることは大きな喜びである。生徒にとっては大いにエキゾチックな文化的な話題を、ただ知っているというだけでなく、日本語、日本文化、日本人に対する親愛の情を背景に指導できるということは、私に大きな満足感をもたらしてくれる。

講 評

他の国でも同じだろうが、日本では時に応じて言い方を変える。例えば、親がクリスマスに子どもにプレゼントを渡すときに「つまらないものですが」(注：この場合の「が」は文全体をソフトにする働きがある)とは言わないが、秘書が上司に旅行みやげを手渡すときには、「つまらないものですが」と言う。この点は、ものを贈るということについての話し合いにつながることである。

欧米でも謙遜して言うのが適当と思われる状況はよくある。“This is just a little something I got in....” (ささやかなものですが)と言って贈り物を渡したり、「まあこんなことをなさなくてもいいのに」と言われて「本当に大したものじゃないんです」と応えたりする。アメリカ人も日本人と同じように、謙遜してこうしたことばを使うのである。教師は、自分たちの社会にそれがどう反映しているかを考えないで、文化のある一面だけに焦点を当て、強調するあまりバランスを欠くような授業は行わないように注意しなければならない。

包む

日本人は贈り物をするとき、贈り物の中身だけではなく、包装も重視することは皆さんご存知の通りです。ある日本人は、外国の人にプレゼントを渡したとき、包装をびりびりと破かれ、悪気はないと知りつつもショックを受けたといいます。日本人はプレゼントをもらったとき、包装紙を破らないようにきれいに開けるばかりか、その包装紙を丁寧に折りたたむことさえあります。

このように、日本人は「包む」という行為に特別な思いを抱いているようです。現代の日本人の日常生活に見られる「包む」ことの意味を考えてみましょう。

包む

「包む」文化は、「結ぶ」文化とともに日本人の信仰において重要な役割を果たしています。たとえば神棚をしめ縄で飾ることによって聖域を俗世から分け、御供物を包むことにより信仰心を表します。日本人にとって「包む」という行為は、清らかなものを汚れたものから区別する心を表します。

また「包む」ということばは、「慎む」から来ていると言われています。「慎む」は、控えめにすること、敬意を示すことです。日本人は直接的なこと、あからさまなことを避け、抑制された控えめなことを好む傾向があります。日本人は人に贈り物をする際、包まずに直接渡すことは失礼に当たると考えます。

物を包むことは、贈り物を汚れや破損から守り、謹んで敬意を表すという、まさに贈り手の心を包むことであるといえます。

贈り物

日本人が贈り物をするとき「包む」行為を重視するのは、美しく丁寧に包むことで贈り手の心を込めたいと考えるからです。昔ながらの包み方が少なくなりつつある現代でも、この考え方は生きています。若い人たちは誕生日や記念日のプレゼント、花束などを贈るときにリボンや紙にこだわり、簡潔、最小限に折り、セロテープで留めて包みます。日本の「包む」文化は、過剰包装だとして批判されることもありますが、美しい紙を保管し、再利用する人も少なくありません。

日本の贈り物の習慣としては、まず、季節の挨拶としてのお中元、お歳暮が挙げられるでしょう。お中元は7月に、お歳暮は年末に、日ごろお世話になっている人に感謝の気持ちを込めて贈る贈り物です。主に会社の上司や先生、仲人など目上の人やお世話になった人に贈ります。もともとは贈り先の家まで直接持参しましたが、今はデパートなどから届けさせます。お中元やお歳暮の季節には、デパートや商店は休日を返上して特別セールを行い商戦を繰り広げます。単なるしきたりで贈るお中元やお歳暮は虚礼だとして、若い世代の間では減少しつつありますが、まだまだ根強く残る習慣です。

お中元やお歳暮をはじめ、包装には、包装紙の模様や上下、包み方、水引と呼ばれるひもの結び方など、しきたりに応じているいろいろなルールがあります。持参するときには、包装した箱をさらに風呂敷に包んでいくこともあります。

風呂敷

風呂敷は物を包んで保管したり、運んだりするための正方形の布です。一辺が70cmから220cmまでと、いろいろな大きさのものがああります。伝統的な風呂敷には唐草模様のもので、おそらく中国と縁があると考えられています。「風呂敷」は、そのことばの組み合わせからもわかる通り、もともとは江戸時代(1600-1868) 銭湯で脱いだ着物を包んだり、湯上がりの足ふきとして使われたものです。風呂敷の特徴は、一枚の布にすぎませんが、包んで結ぶだけの簡潔な動作で、どんな形のもの(大きなもの、小さなもの、丸いもの、四角いもの、びんなど複雑な形のもの)も包んでしまう柔軟性と、中身を取り出せばまた一枚の布に戻り、別のものを包めるという合理性にあるといえます。これは、形の決まった入れ物に中身をあわせるかばんとは異なる点です。この特徴は、日本の着物にも通じます。着物も、着る人の体型にあわせて単純な細工を施した布を体に巻き、たくし上げたり、重ねたりして、ひもや帯で結ぶことで幅や丈を調節します。脱いだ後は元のシンプルな形の布に戻ります。風呂敷は、戦後はかばんにとってかわられ、以前ほど使用されなくなりましたが、今も冠婚葬祭などで使用されます。現代の需要にあわせ、絹や木綿に加えて、化学繊維のものや、柄も伝統的なものだけでなく新しい柄も売り出されています。